



ラグジュアリーの羅針盤

COMPASS
OF LUXURY

高い基準は、人を自由にする

しかし、いったん「ここ」と決めれば、目先の都合と品質を天秤にかける迷いが消えます。最高水準を日常の基準にすれば、判断がぶれず、作り手の誇りも守られます。高い基準は人を迷いから自由にするのです。

六甲山のアトリエでは、職人たちが同じ食卓を囲みます。穂原さんは一人ひとりの好物まで考え、社員にピアノの腕前があると知れば、会社にピアノを置いて練習を勧めます。自然の中で季節を感じ、きちんと食べ、音楽に触れる。人間の感性をすり減らさない環境そのものが、制作工程に組み込まれています。

作品を生む環境は、職人を育てる環境でもあります。ギメルでは、異分野から迎えた人材を一から育てます。入った日から最高水準に触れ、その感覚を身につけてもらうためです。技術の継承とは、「何を当然とするか」という感覚を手渡すことでもあるでしょう。

この話を聞きながら、ブルネロ・クチネリ氏の「人間主義的資本主義」を思い出しました。彼はイタリア・ウンブリアの村ソロメオを修復し、美しい環境や食事、文化に触れる場を整え、職人の道徳的・経済的尊厳を経営の中心に据えてきました。その思想は、ラグジュアリー産業の先駆的な経営モデルとして世界から注目されてきました。

同じ思想は、日本のラグジュアリーにもすでに息づいていたのです。私たちはまたしても、自国にあったものを、海外から届いた新しい理念のように

見上げていたのかもしれませんが、穂原さんは、その思想を言葉で掲げるより先に、職人の食事を気遣い、自然の中にアトリエを構え、音楽のある職場を育ててきました。

ギメルの植物ジュエリーは、裏側まで磨き抜かれ、表からは見えない場所に、宝石でかたどった小さな虫が潜んでいることさえあります。見えないところにこそ手を尽くす。その美意識は、ジュエリーだけでなく、職人たちの食卓や働く環境にも貫かれています。

宝石の輝きは石だけが発するわけではありません。迷いを断つ基準、人間の尊厳、四季、食卓、音楽、それらを守り抜く覚悟。そのすべてが一つの形を得て、ジュエリーは輝きます。自然も人も時間も技術も、何ひとつ粗末に扱わない。その徹底のなかに、ギメルのラグジュアリーの本質があります。

中野香織

富山市出身。服飾史家。東京大学大学院修了。英国ケンブリッジ大学客員研究員、明治大学特任教授などを務めた。最新刊『エレガンス入門』（ちくまプリマー新書）。パレスホテル東京のファッション文化ツアーつき宿泊プランTokyo Fashion Chroniclesの監修を務める。



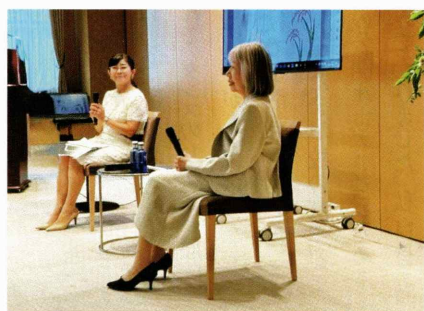
「決めたことを守るのは、そんなに難しくありません。迷っている時がいちばん難しい」

銀座・和光で開催された「ギメル展―百花繚乱」において行われたトークイベントで、アートディレクターの穂原かおるさんがさらりと語った言葉です。

ギメルは、穂原さんが1974年に興したダイヤモンド輸入会社を母体に、1991年にデビューした日本発のハイジュエリーです。日本の四季や動植物の瞬間の輝きを、選び抜いた宝石と驚異的な細工でとどめるのが特徴です。サザビーズやクリスティーズの国際オークションにも作品が登場する、世界水準の独立系ジュエラーです。

会場には、宝石で写し取られた四季が咲き競っています。色石の繊細なグラデーションに一石でも違和感があれば、ふさわしい石が現れるまで待つそうです。完成を急いで基準を下げることはありません。

高い基準は作り手を窮屈にするように見えます。



上)銀座・和光で開催された、ギメルのアートディレクター穂原かおるさん(右)と元『家庭画報』編集長・千葉由希子さんによるトークイベント。「百花繚乱」をテーマに、ギメルの世界観が語られた
下)細かい宝石でつくられた「花」のジュエリーのひとつ。小さなかわいい「虫」まで潜んでいる